

令和2年度病虫害発生予報第6号の発表について

このことについて、次のとおり発表したもので送付します。

《予報の概要》

太文字の病虫害：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

* 予報根拠中の記号

- (+)：発生量を多くする要因
- (-)：発生量を少なくする要因
- (±)：発生量が平年並になる要因

作物名	病虫害名	予想発生量
水 稲	穂いもち	やや少
	紋枯病	やや多
	斑点米カメムシ類	やや多
	トビイロウンカ	多
ダ イ ズ	葉焼病	並
	ハスモンヨトウ	やや多
	吸実性カメムシ類	やや多
	ハダニ類	並
カンキツ	黒点病	並
	かいよう病	やや少
	ミカンハダニ	やや少
	ミカンサビダニ	並
	アブラムシ類	やや少
モ モ	せん孔細菌病	並
	ハダニ類	並
	モモハモグリガ	やや少
	ナシヒメシンクイ	並
カ キ	炭疽病	やや少
ブ ド ウ	べと病	並
果樹の 共通害虫	カメムシ類	多
露地 キュウリ	べと病	やや少
	炭疽病	やや多

作物名	病虫害名	予想発生量
露地 キュウリ	褐斑病	並
	うどんこ病	並
	斑点細菌病	並
	モザイク病	並
	ワタヘリクロノメイガ (ウリノメイガ)	やや多
	ミナミキイロアザミウマ	やや少
青 ネ ギ	疫病	やや多
	軟腐病	やや多
	ネギハモグリバエ	やや少
イ チ ゴ	炭疽病	やや多
	うどんこ病	並
露地キク	白さび病	やや多
野菜、花き の共通害虫	アブラムシ類	やや少
	アザミウマ類	並
	(主にネギアザミウマ)	
	ハスモンヨトウ	やや多
	シロイチモジヨトウ	やや多
	タバコガ類	
	(タバコガ、オオタバコガ)	並
ハダニ類	並	
ハモグリバエ類		
(トマトハモグリバエ、 マメハモグリバエ)	並	

令和2年度 病虫害発生予報 第6号（9月）

A. 水稻の病虫害

1. 穂いもち

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 綾歌郡綾川町の県予察圃場での8月下旬の葉いもちの発生量はやや少なかった。(－)

(2) 8月中旬の普通期栽培での葉いもちの発生量は少なかった。(－)

(3) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

対 策 出穂期頃の防除を励行する。

2. 紋枯病

予 想 発生量 : やや多

根 拠 (1) 8月中旬の普通期栽培での発生量は平年並であった。(±)

(2) 9月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か多い(＋)予報である。

対 策 出穂後も上位進展が続く場合は、液剤や粉剤で早急に追加防除する。

3. 斑点米カメムシ類

予 想 発生量 : やや多

根 拠 (1) 8月中旬の普通期栽培周辺の畦畔雑草のすくい取り調査では、発生量は少なかった。(－)

(2) 8月中旬の早短期水稻の穂上でのすくい取り調査では、発生量はやや少なかった。(－)

(3) 県予察灯でのミナミアオカメムシ、クモヘリカメムシの7月第6半旬から8月第5半旬の誘殺数は、過去9か年の平均に比べ多かった。(＋)

(4) 防除員報告では、発生量の多い地区があった。(＋)

(5) 9月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か多い(－)予報である。

対 策 (1) 薬剤防除の時期は、液剤や粉剤の場合は出穂期頃とその10～15日後であり、粒剤の場合は7日程度早めて処理する。また、ミナミアオカメムシが繁殖している場合は、粒剤よりも速効的で効果が高いとされる液剤や粉剤の使用が望ましい。

(2) 防除効果を高めるために、地域一斉防除に努める。

(3) 出穂後の除草は、斑点米カメムシ類の圃場への侵入を助長するので控える。

4. トビイロウンカ

予 想 発生量 : 多 (令和2年8月21日付け注意報第3号発表)

根 拠 (1) 綾歌郡綾川町の県予察圃場では発生を認めなかった。(－)

(2) 8月中旬の発生は普通期栽培で多く(＋)、一部の圃場で増殖率の高い短翅型雌成虫が確認された。

(3) 県予察灯での7月第6半旬から8月第5半旬までの誘殺数は過去9か年の平均並であった。(±)

(4) 9月の気象は気温が高い予報である。(＋)

対 策 (1) 出穂期頃の必須防除を徹底する。薬剤散布の際は斑点米カメムシ類の防除を兼ねて行う。

(2) 圃場における発生状況を確認し、25株調査して250頭(株当たり10頭)以上の発生を認めたら早急に追加防除を行う。

(3) 本虫の発生は、圃場間や同一圃場内でも偏りが大きいので、防除を行った

場合でもその後の発生状況に十分注意し、防除効果を確認するとともに必要に応じて追加防除する。

- (4) 本虫は株元に生息しているので、薬剤散布は株元まで薬剤が届くよう、丁寧に行う。
- (5) 薬剤散布は、地域の防除暦などを参照して、収穫前日数や使用回数などの使用基準を遵守して行うとともに、周辺圃場への飛散防止に努める。

B. ダイズの病害虫

1. 葉焼病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 8月中旬の発生は認めなかった。(－)

(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(+) 予報である。

対 策 台風等で風雨が連続した場合は、バリダマイシン5%液剤等の殺菌剤を散布する。

2. ハスモンヨトウ

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) ダイズでの8月中旬の白変葉の発生量は多かった。(＋)

(2) 8月下旬の発生量は秋キュウリではやや少なく(－)、イチゴ育苗床では平年並であった(±)。

(3) フェロモントラップでの8月の誘殺数は、過去9か年の平均並であった。(±)

(4) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(－) 予報である。

対 策 (1) 若齢幼虫は集団で食害するため、被害葉は表皮だけを残して白色になっているので、これらを発見したら摘葉するとともに薬剤防除を行う。

(2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. 吸実性カメムシ類

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 8月中旬の発生量は多かった。(＋)

(2) 綾歌郡綾川町の県予察灯でのミナミアオカメムシの7月第6半旬から8月第5半旬までの誘殺数は過去9か年の平均に比べ多かった。(＋)

(3) 8月中旬の早短期水稻の穂上でのすくい取り調査では、ミナミアオカメムシの発生量はやや少なかった。(－)

(4) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(－) 予報である。

対 策 着莢初期から子実肥大期に2～3回薬剤防除する。

4. ハダニ類

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 8月中旬の発生は認めなかった。(－)

(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(－) 予報である。

対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の雑草は発生源となるため、除草に努める。

(2) 多発すると薬剤防除の効果が劣るので、圃場をよく見回り発生初期に防除する。

C. 果樹の病害虫

－カンキツ－

1. 黒点病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生量はやや少なかった。(－)
 (2) 一般圃場での8月下旬の発生量は平年並であった。(±)
 (3) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 伝染源である枯枝を除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
 (2) 薬剤散布は、前回の散布から1か月以内または累積降水量250～300mmを目安に行う。

2. かいよう病

- 予 想 発生地域： 中晩生カンキツ栽培地
 発生量： やや少
- 根 拠 (1) 一般圃場での8月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
 (2) 県予察圃場でのミカンハモグリガの8月の発生量はやや少なかった。(－)
 (3) 一般圃場でのミカンハモグリガの発生量は少なかった。(－)
 (4) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 発病した梢葉、果実は早めに除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
 (2) 樹勢を健全に保ち、ミカンハモグリガ防除と防風対策を徹底する。

3. ミカンハダニ

- 予 想 発生量： やや少
- 根 拠 (1) 一般圃場での8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
 (2) 9月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か多い(－)予報である。
- 対 策 (1) 秋ダニが果実に寄生すると品質に悪影響を及ぼすので、寄生を認めれば直ちに薬剤防除を行う。
 (2) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統薬剤の使用は年1回とする。

4. ミカンサビダニ

- 予 想 発生量： 並
- 根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
 (2) 一般圃場での8月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
 (3) 9月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か多い(－)予報である。
- 対 策 発生が多い圃場では、9月中旬までに防除する。

5. アブラムシ類

- 予 想 発生量： やや少
- 根 拠 (1) 一般圃場での8月下旬の発生量は平年並であった。(±)
 (2) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(－)
- 対 策 発生が多い圃場では、防除する。

一モ モー

1. せん孔細菌病

- 予 想 発生量： 並
- 根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生量は平年並であった。(±)
 (2) 一般圃場での8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
 (3) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 発病枝は伝染源・越冬源となるので、見つけしだい除去し圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
 (2) 9月下旬から10月中旬の薬剤防除を徹底する。多発生圃場では薬剤を2回散布する。
 (3) 台風通過後など強い風雨の後に薬剤防除を実施するよう心がける。

(4) 風当たりの強い圃場では、防風ネット等の暴風対策を実施する。

2. ハダニ類

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 一般圃場での8月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並が多い(-) 予報である。

対 策 (1) 発生が多い圃場では、収穫後の薬剤防除を徹底する。
(2) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統薬剤の使用は年1回とする。

3. モモハモグリガ

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生は認めなかった。(-)
(2) 県予察圃場のフェロモントラップでの8月の誘殺は認めなかった。(-)
(3) 一般圃場での8月下旬の発生は認めなかった。(-)

対 策 本種の被害による早期落葉は、翌年の花芽確保ができなくなるなどの影響があるので、発生が多い圃場では防除する。

4. ナシヒメシンクイ

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生量はやや多かった。(+)
(2) 県予察圃場のフェロモントラップにおける8月の誘殺数は平年並であった。(±)
(3) 一般圃場での8月下旬の発生量は平年並であった。(±)

対 策 収穫後の防除を行っていない圃場では、薬剤防除を実施する。

ーカ キー

1. 炭疽病

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生は認めなかった。(-)
(2) 一般圃場での8月下旬の発生は認めなかった。(-)
(3) 9月の気象は降水量が平年並が多い予報である。(+)

対 策 (1) 圃場内をよく観察して、発病果実や発病枝は見つけしだい除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。特に前年多発生した圃場では注意する。
(2) 台風や長雨が予想される場合や常発圃場では、予防的に薬剤防除を行う。
(3) 授粉樹や老木など、剪定や粗皮削り等の管理作業を実施していない樹の周辺で発生が増加する場合があるので注意する。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ーブドゥー

1. ベと病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 一般圃場での8月下旬の発生量はやや少なかった。(-)
(2) 9月の気象は降水量が平年並が多い予報である。(+)

対 策 (1) 圃場の排水に努める。
(2) 収穫後の薬剤防除を徹底する。
(3) 薬剤防除は降雨の前後に重点をおく。

ー果樹の共通害虫ー

1. カメモシ類

- 予 想 発生地域： 県下全域
発生量： **多**（令和2年5月22日付け注意報第2号発表）
- 根 拠 (1) 8月の県予察圃場予察灯の誘殺数は多かった。（+）
(2) 8月の綾歌郡綾川町の予察灯の誘殺数は、過去9か年の平均並であった。（±）
(3) 一般圃場のカキでの8月下旬の発生量はやや少なかった。（-）
- 対 策 (1) 施設栽培の場合は、開放口をネット（4mm目合い）で覆うとカメムシ類の侵入防止対策となる。
(2) 圃場内をよく観察し、被害果実やカメムシ類の発生が見られる場合は、早急に防除を実施する。特にスギ、ヒノキ等が周辺に多い圃場や、過去に被害が認められた圃場では注意する。
(3) 多発してからの防除は効果が劣る場合があるので、発生初期の防除を徹底する。
(4) 成虫は夕方に飛来し夜間加害するので、薬剤散布は夕方に広域かつ一斉に行うと効果的である。
(5) 黄色蛍光灯は、チャバネアオカメムシには忌避効果があるが、ほかのカメムシ類には効果がないので注意する。
(6) 防除薬剤は、地域の病害虫防除暦等を参考にする。
(7) 作物によって、登録のある薬剤が異なるので、使用にあたってはラベルをよく読んで、登録の有無や収穫前日数、使用回数等使用基準を遵守する。

D. 野菜、花きの病害虫

－露地キュウリ－

1. ベと病

- 予 想 発生量： やや少
- 根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生量はやや少なかった。（-）
(2) 9月の気象は気温が高く（-）、降水量が平年並か多い（+）予報である。
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、肥料切れに注意し、樹勢が衰えないように栽培管理する。
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 炭疽病

- 予 想 発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生量は平年並であった。（±）
(2) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。（+）
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。曇雨天が続くような場合に発病を認めたら適宜防除する。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. 褐斑病

- 予 想 発生量： 並
- 根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生は認めなかった。（-）
(2) 防除員報告では、発生はやや多い地区があった。（+）

- (3) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(+)
 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理する。
- (2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
- (3) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。曇雨天が続くような場合に発病を認めたら適宜防除する。
- (4) 薬剤防除は、炭疽病を対象に実施すれば本病にも効果がある。
- (5) ベンゾイミダゾール系薬剤 (FRACコード1)、ジエトフェンカルブ (FRACコード10)、Q o I 剤 (FRACコード11) 及びSDHI 剤 (FRACコード7) に対して感受性の低い菌株が確認されているので注意する。
- (6) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. うどんこ病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
- (2) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(+)
 対 策 (1) 窒素過多にならないよう肥培管理する。
- (2) 耐病性品種を用いる。
- (3) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で実施する。
- (4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. 斑点細菌病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
- (2) 9月の気象は気温が平年並か高く (+)、降水量が平年並か多い (+) 予報である。
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに過繁茂にならないよう栽培管理する。
- (2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
- (3) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。
- (4) 台風など大雨や強風の後には感染が助長されるので、早めに薬剤防除を行う。
- (5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

6. モザイク病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生量は平年並であった。(±)
- (2) 秋キュウリでの8月下旬のアブラムシ類の発生量はやや少なかった。(－)
- (3) 防除員報告では、発生やや多い地区があった。(+)
 対 策 (1) 収穫用具の消毒をする。
- (2) 発病株は、早期に抜き取り圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
- (3) アブラムシ類の防除を行う。

7. ワタヘリクロノメイガ (ウリノメイガ)

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生量は平年並であった。(±)
- (2) 9月の気象は気温が高い予報である。(+)
 対 策 (1) 老齢幼虫は葉を巻いて中に潜むようになるため薬剤がかかりにくくなるの

- で、圃場をよく見回り若齢期に薬剤散布する。
(2) 防除した後も成虫が飛来、産卵するので、常に幼虫の発生に注意する。

8. ミナミキイロアザミウマ

- 予 想 発生量 : やや少
根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(－)予報である。
対 策 (1) 施設栽培では、防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設
するなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 施設の発生圃場では、栽培終了後、施設を密閉し死滅させる。
(4) 本虫が媒介する黄化えそ病の発生地域では、本虫を対象に定植時に必ず粒
剤または灌注処理し、定期的に薬剤防除を実施する。発病株を認めたら早急
に地上部を除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－青ネギー

1. 疫病

- 予 想 発生量 : **やや多**
根 拠 (1) 8月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 防除員報告では、発生やや多い地区があった。(＋)
(3) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)
対 策 (1) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
(2) 発生が多い圃場では菌密度が高くなっているため、圃場を変えるか土壌消
毒を実施する。
(3) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 軟腐病

- 予 想 発生量 : **やや多**
根 拠 (1) 8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(+)予報である。
対 策 (1) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理をする。
(2) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
(3) 発生が多い圃場では菌密度が高くなっているため、圃場を変えるか土壌消
毒を実施する。
(4) 薬剤散布は7～10日間隔で行う。
(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. ネギハモグリバエ

- 予 想 発生量 : やや少
根 拠 (1) 8月下旬の発生は認めなかった。(－)
(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(－)予報である。
対 策 (1) 収穫終了後の茎葉は次作の発生源になるので、土中に埋めるか、古ビニール
等で被覆するなど適正に処分する。
(2) 多発してからの防除は困難であるため、産卵痕や食害痕が見え始めたら早
めに防除する。
(3) 定植時には育苗トレイ灌注または粒剤を施用する。

－イチゴ－

1. 炭疽病

予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 育苗床での8月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 防除員報告では、発生やや多い地区があった。(+)
(3) 9月の気象は気温が高い予報である。(+)

- 対 策 (1) 発病株は見つけしだい除去し圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(2) 水滴の飛散等で伝染するので、発病が見られる圃場では、灌水の跳ね返り等がないようにする。発病株は伝染源になるので除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) ベンゾイミダゾール系薬剤 (FRACコード1) やQ o I 剤 (FRACコード11) に対して感受性の低い菌株が確認されているので注意する。
(4) 予防剤を定期的に散布し、発生が見られたら治療効果のある薬剤を散布する。
(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. うどんこ病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 育苗床での8月下旬の発生量はやや多かった。(+)
(2) 9月の気象は気温が高い予報である。(－)

- 対 策 (1) 発病葉は可能な限り除去するとともに、除去した発病葉は伝染源となるので、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(2) 現在、病徴が現れていない場合でも、潜在感染している可能性が高いので、防除を徹底し、保菌率を低下させるよう努める。
(3) 夜冷期間中はうどんこ病菌にとって好適条件になるため、防除を徹底する。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－露地キク－

1. 白さび病

予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 8月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(+)

- 対 策 (1) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理をする。
(2) 薬剤防除は予防的に実施し、発生量が増加した場合はクレスキシムメチル Q o I 剤 (FRACコード11) 等の治療剤を用いる。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－野菜、花きの共通害虫－

1. アブラムシ類

予 想 発生量 : やや少

- 根 拠 (1) 8月下旬の発生量は秋キュウリ、イチゴ育苗床でやや少なかった。(－)
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での8月の誘殺数は、過去9か年の平均に比べやや少なかった。(－)
(3) 9月の気象は気温が高く (+)、降水量が平年並か多い (－) 予報である。

- 対 策 (1) 今後作付を行う場合は、防虫ネットで被覆したり、光反射資材を設置するなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 育苗期から生育初期に粒剤等を施用する。なお作物の種類に応じて農薬登録の適用に配慮する。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. アザミウマ類（主にネギアザミウマ）

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 8月下旬の発生量は青ネギ、秋キュウリで平年並であった。(±)

(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(-) 予報である。

対 策 (1) 施設栽培では、防虫ネットを張ったり、光反射資材を施設周縁部に敷設するなどして、侵入防止対策を講じる。

(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(3) アスパラガスでは、圃場内の数か所で成茎の擬葉が繁茂しているところを手で払って、10×20cm程の板上に1か所当たり1～5頭の成虫を認めたら防除する。

(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. ハスモンヨトウ

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) ダイズでの8月中旬の白変葉の発生量は多かった。(+)

(2) 8月下旬の発生量は秋キュウリではやや少なく(-)、イチゴ育苗床では平年並であった(±)。

(3) フェロモントラップでの8月の誘殺数は、過去9か年の平均並であった。(±)

(4) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(-) 予報である。

対 策 (1) 若齢幼虫は集団で食害し、その後周囲に分散するので、初期の食害発生に注意し、卵塊や幼虫集団は見つけしだい捕殺する。

(2) 育苗床では防虫ネットで被覆するとともに、施設栽培の場合は開口部を防虫ネット(4mm目合以下)で被覆する。

(3) フェロモントラップの誘殺状況や圃場内での本虫の発生に注意し、適期に防除を行う。

(4) 幼虫集団が食害した後は、表皮だけを残した白変葉となるか、葉脈だけを残した状態となっているので、圃場内でこれらの葉を多く見つけたら、直ちに薬剤防除を行う。

(5) 薬剤の効果が高いのは体長1cm程度までの幼虫であるので、早期発見に努める。

(6) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. シロイチモジヨトウ

予 想 対象作物 : 青ネギ、アスパラガス、キク、カーネーション等

発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 8月下旬の青ネギでの発生量はやや多かった。(+)

(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの8月の誘殺数は、過去9か年の平均に比べやや多かった。(+)

(3) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(-) 予報である。

対 策 (1) 中老齢幼虫には薬剤の効果が劣ったり、ネギ等では食害して葉の内部に潜り込むと防除効果が低下するので、圃場をよく見回り若齢期に薬剤防除を行う。

(2) 圃場内及び圃場周辺の雑草は増殖減になるので、除草に努める。

(3) 施設栽培の場合は開口部を防虫ネット(4mm目合以下)で被覆し、侵入を防止する。

(4) ジアミド系薬剤(IRACコード28)の一部の薬剤に対して感受性低下の事例が確認されているので注意する(病虫害防除所発表技術資料

(<http://www.jppn.ne.jp/kagawa/30.htm>)等参考)。

(5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. タバコガ類（タバコガ、オオタバコガ）

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 8月下旬のキュウリでは発生量は平年並であったが、一部地域の花き類で発生がやや多かった。(+)

(2) 綾歌郡綾川町のタバコガ類のフェロモントラップでの誘殺数は、過去9か年の平均に比べやや少なかった。(－)

(3) 防除員報告では、丸亀市飯山町のフェロモントラップでのオオタバコガの誘殺数は少なかった。(－)

(4) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並が多い(－) 予報である。

対 策 (1) タバコガ類の幼虫は、作物の果実や生長点付近の茎葉、花蕾に潜り込んで加害するので、その周辺を中心に幼虫を探して、見つけ次第捕殺する。

(2) 被害果実、被害茎、収穫残さなどは放置せず圃場外へ持ち出して処分する。

(3) 圃場内及び圃場周辺の雑草は増殖源になるので、除草に努める。

(4) 施設栽培の場合は、開口部を防虫ネット(4mm目合以下)で被覆する。

(5) 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低いので、早期発見に努め、防除効果の高い若齢幼虫期に薬剤散布を行う。

(6) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

6. ハダニ類

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 8月下旬の発生量は、イチゴ育苗床、秋キュウリでやや少なかったが、一部地域の野菜、花き類で発生がやや多かった。(±)

(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並が多い(－) 予報である。

対 策 (1) 施設栽培では、人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。

(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(3) 発生が局所的な場合には、スポット散布を行う。

(4) 多発圃場では5～7日間隔で3回程度防除する。

(5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

7. ハモグリバエ類（トマトハモグリバエ、マメハモグリバエ）

予 想 対象作物: キュウリ、トマト、ミニトマト、ナス、キクなど
発生量 : 並

根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)

(2) 9月の気象は気温が高い予報である。(＋)

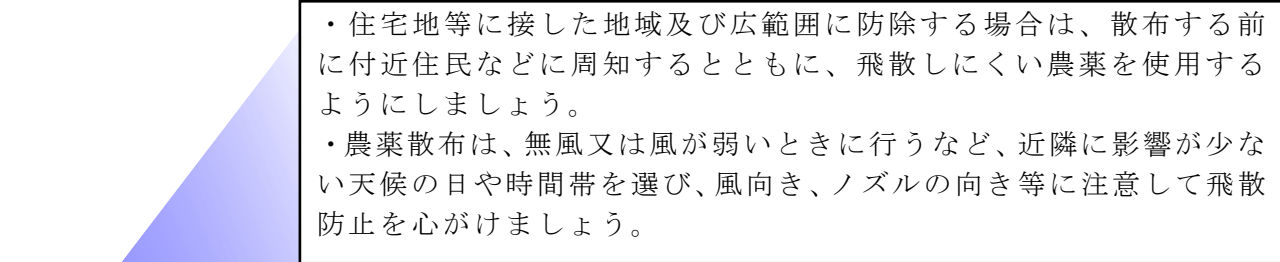
対 策 (1) 施設栽培では防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。

(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(3) 摘葉した残さや、収穫終了後の茎葉やとり残しの放置株は、次の発生源になるので圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

(4) 施設の発生圃場では、栽培終了後、後作まで何も植えず20日以上施設を密閉し、死滅させる。

(5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

- 
- ・住宅地等に接した地域及び広範囲に防除する場合は、散布する前に付近住民などに周知するとともに、飛散しにくい農薬を使用するようにしましょう。
 - ・農薬散布は、無風又は風が弱いときに行うなど、近隣に影響が少ない天候の日や時間帯を選び、風向き、ノズルの向き等に注意して飛散防止を心がけましょう。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病害虫防除所インターネットホームページ

URL: <http://www.jppn.ne.jp/kagawa/>